子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1996年7月1日発行　[隔月発行]

文化高知

'96年7月 NO.72

「あのねのね」 西森 晃

(財) 高知市文化振興事業団

郷里に新しい職を得て

成田十次郎

四十年ぶりの帰郷である。会う人みなありがたく、見るものみな懐かしく、聞くものみな心に響き、訪れるところみな往時にさそう。

県庁の西から登ってお城の北をめぐる道は、今も昔とおなじく老樹が茂り、昼でも薄暗く、行きかう人もまばらである。静けさを破るのは足音だけであり、この道に入ると、昔も今も哲学者になった気分になる。その昔は、これからの自分の前に開けた果てしない世界にさまざまな夢を描いて歩いたものであるが、今では、ほぼ正確に読み取れる残された時間をいかに終えるかに想いをめぐらして足を運んでいる。

その昔、「すべりやま」に立つと、眼前に家並みが迫り、はるか彼方に連山が遠望された。今では、樹木が茂り、家並みを隠し、木の葉越しに山々の頂きが見えるだけである。

その昔、三の丸の広場には占領軍の兵士たちの宿舎があり、片隅のセメントのバスケットボールのコートで、彼らと私たちはゲームを楽しんだことがあった。今では、広場全体が桜の木に埋めつくされており、春の宵のにぎわいが想像をたくましくする。

三の丸の東端に立つと、その昔、「数万のいらか見下ろして、天そそり立つ高坂の、古城と高さ競いつつ、雄々しく立てる時計台」と校歌に歌われた白亜の時計台が眼前にそびえ、胸が高鳴ったものである。しかし、今では、その姿を求めて本丸に登ってもむなしく、ビル群の中に埋もれた緑色の屋根をかすかに発見するだけである。

追手門を出て東に進むと、その昔、登校途中、ここで米軍のグラマン機の機銃掃射を受け、楠の樹間を逃げ惑った旧友たちがいた。今では、その樹は大樹となり、平和で、涼しい陰を路上に落としている。

その昔、「ツウー」(土佐高女)の女学生の目を気にしながら角を左に曲がり、西門から入った運動場で、私は疲れも知らずサッカーに打ち込んだものである。今では、焼けつくような太陽のもとでボールを追う若者たちを眺めているだけで軽い目まいを覚える。

追手前高校の東北端を西に折れ、歩道に黄色い花が咲き乱れる道をさらに北に折れて進むと、欅の大樹の下に、それとはわからないほどのつつましい、わが高知女子大学・高知短期大学の校門がある。その昔、私たちは上級生から、「じっきに北に怖いおばさんらあの学校があるぜよ」と聞かされていたが、確かにこの大学からは多くの優れた人材を輩出しているし、何よりも幾たびかの廃校の危機に示した、学生、教職員、卒業生たちの精神は、畏敬と賛嘆に値する。

今、この大学に職を得て、先輩の偉業に応えるだけでなく、直面している改革・新設・移転の構想をいかに実現し、大学の仲間(生徒・教職員)の希望と県民の期待をどれだけ達成できるかに想いをいたすと、懐旧の回想は一瞬のうちに消え、身が引き締まる。

県民だれでもがもっと気軽に授業に出られないものか、卒業生はもっと大学の諸々のことに参画できないものか、県内の大学との交流は公式非公式にもっと活発にできないものか、諸外国の人々が行き交い、これが私たちの大学かと疑うような彩りを大学に与えられないだろうか。行政の施策に生かされ、県民の福祉に役立つ研究を促進するにはどうすればよいのだろうか。何よりも、「世界に目を開いたきりっとしたレディー」を育てる教育とはどんなものであろうか。等々。

毎日、行きつくところはそれらをめぐる自問自答である。大学構成員だけでなく、県民のご提言を待つこと切である。

(高知女子大学学長)

震災と電話

坂本　千代

その瞬間はいったい何が起こったのかわからなかった。まるで爆撃のような強い衝撃で夫と私はとび起きた。「外に出ろ」と夫が叫び、玄関の戸をけやぶって出た。築五十年以上たつ私たちの借家(神戸市灘区)は、かろうじて屋根と天井が残ったものの、壁はくずれ、後方は裂けて見るも無残な状態になっていた。

どこかでガス管が壊れたらしく、ガスのにおいのたちこめるなか、私たちは茫然とつったっているのみであったが、やがて夫はフランスにいる両親(夫はフランス人である)に連絡しなければと思い到った。日仏の時差が八時間あるためむこうは真夜中だが、明日の朝のテレビやラジオでこちらの地震のことを知ったら両親はひどく心配するにちがいない、と言うのである。

さまざまなものをかきわけて、私たちは惨憺たるありさまの台所にある電話に辿り着いた。ベッドにいる両親を起こして、夫がこちらで地震が起きたことを伝えている最中に、もう一度ぐらりと揺れた。私たちはワッと声をあげて電話を切るなり外に飛び出した。神経が過敏になっていて、かすかな余震でも大きな揺れのように思ってしまうのだ。

外に出てからやっと私たちは今の中途半端な電話では両親がどれほど不安がるかに気づいた。そこで、少し落ち着いてからもういちどこわごわ家に入り、余震があるけれど我々はだいじょうぶだと電話しなおしたのであった。

しばらくたつと、市内に住むフランス人の友人が様子を見にきてくれた。彼の住居は大きくて頑丈なマンションで、そのうえ神戸の山側にあるためほとんど被害がなかったので

ある。私たちはその友人宅に避難することになった。

この友人夫婦は自宅に電話を置かない主義であった。御主人の会社に電話とファックスがあってこれで重要な用件の連絡がつくため、家には電話を引いていないのである。これには私も夫も困ったのであった。

地震のさい着の身着のまま飛び出した私たちであったが、その後の数日間はほとんど何もできない状態だった。交通網がズタズタのため仕事に行けない夫は、友人とともに我が家に戻っては中のかたづけをした(かたづけ、だけである。家財をいくら取り出しても、持っていく場所も手段もなかったので)。そしてそこで毎日毎日、時刻を決めてフランスの両親と電話をかけあっていたのである。むこうのテレビでも、燃えさかる炎や瓦礫の山、倒れたビルや高速道路の報道ばかりであった。両親は何も手につかないほど心配していたが、私たちが身を寄せている友人宅に電話がないため、全壊した家の台所の電話でしか息子の声を聞くことができなかったのである。

瓦礫の山となって水も食料もない街、すぐとなりの安全な地域に行くための交通手段が自分の足くらいしかない神戸から、一本の細い電話線が地球の反対側、フランスの小都市に住む両親のアパートの居間とつながっていたのだ。震災後数日の間、余震にびくびくしながらも、夫は壊れた家の中からさまざまな人に電話をかけまくっていた。私はといえば、夜になると友人宅からかなりある公衆電話まで歩いて、高知の家族やしばらく交渉のなかった遠くの友人たち(近距離の電話はかからなかったので)と何度も何度も同じような話をしたのであった。当時はすべての公衆電話がタダ(国内通話のみ)だったのである。平穏な暮らしに突如ふってわいたパニックにうちひしがれていた私たちのあやうい精神のバランスを保つのに、これがどれほど役立ったかは今さら言うまでもないであろう。この点については私たちは電話局の計らいに本当に感謝している。

震災後しばらくしてやっと大阪に小さなアパートをみつけた私たちが最初に考えたのは、もちろん電話を引くこと……。夫はそのあと携帯電話まで買い揃えたのであった。

(神戸大学助教授)

インドネシア国際医学交流の事始め

知休　悠詠

今から三十五年程前の昭和三十六年六月の中頃、さる県立医科大学（現在は国立移管され国立大学医学部となっている）の専門課程の一年生として、解剖学、組織学の実習を行っていた学生の間で、海外へ行きたいという話が盛り上がってきた。といっても当時はやっと戦後の復興も波に乗り、その前年には池田内閣の所得倍増論が発表され、その後の日本の素晴らしい経済発展の端緒が切って落とされたばかりの時期であった。

まだ日本人の海外旅行は自由化されておらず、海外へ出かけられるのは商社マンか、アメリカのフルブライト奨学金やドイツのフンボルト財団奨学金等をもらって、奨学生としてアメリカやドイツへ留学するエリートの研究者のみであった。それゆえ海外へ行くためには、何々のための親善とか、研究調査のためとかの名目が必要で、それも相手国より招待の形を取らなければ、ほぼ不可能であった。しかも貧乏な医学生が行くのだから、あまり遠い所ではだめで、しかも、医学生の特質を生かした医学調査を兼ねた、行った相手国のお役に立てそうな国をというわけで、インドネシア等東南アジアの国々の事情を調べ始めた。

ちょうどその頃、大阪の方のさる国立大学工学部の大学院に、インドネシアからの留学生が在学しておられ、インドネシアのお話を聞かせてもらった所、インドネシアは当時の日本に比べても、かなり貧しく、医療事情も非常に悪く、そのような計画があるなら、インドネシア人としては是非来て欲しいとの事であった。また、インドネシアは対日感情も悪くないことがわかった。

それではインドネシア政府自身は、このような計画をどの様に考えているのかを知るため、インドネシア領事館に出かけ、領事にお会いし、お話をうかがった所、非常に好意的で、いい話だから、是非実現して欲しい旨の励ましをいただいた。このようなわけで、実習をしながら、誰が行くか、旅費はどうするか、どのような形の調査をするか等、いろいろと話しあった。しかし、その後実習がますます忙しくなり、試験その他に追われるようになって、いつしか、この話は立ち消えとなった。

しかし、この企画は三年後の昭和三十九年に、また甦ることとなった。当時は医師になるには、医学部卒業後一年間のインターンが義務付けられており、専門課程四年生になると、臨床実習と一部の臨床講義のみでて、比較的時間的余裕があった。また、この年は東京オリンピックが開催され、日本人の海外旅行が自由化された年でもあり、日本人全体が海外を意識し始めた年であった。このようなことに刺激され、ある時、元学生自治会をやっていたメンバーを中心に、この話が再燃し、学年の枠を越え、教授会の賛同と協力を得て、先輩の先生方の全面的な協力の下に、インドネシアに医療調査隊を派遣することが可能となった。

昭和三十九年七月より十月まで、第一次インドネシア医学調査隊が、インドネシア政府、日本外務省および地方新聞社を始め、多くの企業の協力と援助により、スマトラ島のメダン、パダン、ジャワ島のジャカルタ、バンドン、バリ島、ロンボク島と広い範囲へ派遣され、主として、ロンボク島のレンダンナンカ村での医療調査を行ってきた。以降昭和四十五年までに五回の調査隊が派遣された。

このようにして始まった海外医療協力は、その後若い医師、研究者の養成を熱望するインドネシア側の要請を受け、ＯＴＣＡ（海外技術協力事業団）からの医療援助や、その大学のいろいろな診療科や研究室との医療協力が行われるようになり、多くの若手の医師、研究者がインドネシアに滞在し、生活を共にして、医学の教育、研究の指導をしてきた。また、大学はＪＩＣＡ（日本国際協力事業団）による「熱帯医学」や、「医科学技術」の集団研修を引き受け、インドネシアのみならず、広くアジア、アフリカ、中南米からの医師を受け入れ、多くの講座がこれに参画し、研修を行ってきた。これらの実績が認められ、文部省の発展途上国との学術交流の推進を図る政策とも相まって、昭和五十四年に全国でも唯一の医学研究国際交流センターが設置され、インドネシアを始め、アジアの国々から、留学生を受け入れ、また、専門家を派遣し、学術交流の実績を上げている。

このように、医学協力を主体とした国際交流が発展的に軌道に乗った要素は、大きく考えて三つあると思われる。先ず第一にタイミングである。昭和三十九年は東京オリンピック、海外旅行自由化と、日本人全体が世界を意識し出したときであり、一方インドネシアでは、第一次医学調査隊が派遣された翌年、クーデターが勃発し、もう一年遅ければ、調査隊派遣どころではなく、全く受け入れてもらえなかったことになっていたであろう。

第二に国際交流は相互メリットがなければ、結局は長続きしない。インドネシアは熱帯地方にあるため、現在では日本で見られない伝染病、熱帯性疾患があり、微生物学者や寄生虫学者にとっては格好のフィールドであり、また臨床家にとっても、日本では見られない疾患を経験することができると同時に、比較疫学的にいろいろな研究ができることである。インドネシア側にとっても、これを契機に、若手医師、研究者に最新の医学を研修する場を提供することができ、今後の医学の発展を期することができる。

そして何より大切なことは第三に人間関係である。発案が学生の間からの自然発生的なものであり、大学当局、先輩の間に多くの賛同者を得ることができたこと。それを通じ、日本の外務省、インドネシア側の保健省などに多くの方々の支援を得ることができたことである。このような人間関係は、交流を続け深めていくに従い、さらに一層強まり、相互の理解がますます深められ、ひいては世界平和に寄与していくことになろう。

（高知医科大学教授）

賛助会員募集中!!

会　　費　　年額　2,000円

特　　典
① 機関紙「文化高知」を年６回お手元にお届けします。
② 事業団発行の出版物の10%割引（一部例外あり）
③ 主催事業や刊行物の案内（マスコミ利用の場合あり）
〔※上記特典は申し込みいただいた日から１カ年有効〕

※お申し込み　①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

新しい家庭科教育の創造をめざして

菊地るみ子

みなさんは、どのような家庭科を学ばれたのでしょうか。それとも全く学ばれなかったのでしょうか。

学校教育の中で、どのような教科を、どのように学ぶかは時代によって変わっています。特に家庭科は近年大きく変わり、女子だけの教科から、ようやく他の教科並みに小学校から高校まで男女が共に学ぶ家庭科へ転換しました。一九八九年三月のことです。

戦前には家庭科はなく女子だけが裁縫と家事を学び、戦後「民主的な家庭建設をめざす教育」として家庭科は新設されたのですが、現実には女子用教科として受け止められてきましたので、制度上のこの転換は大きな意義をもっています。

私が学んだ家庭科は、小学校では男女共学であり、男子が上手に刺繍していたことが印象に残っています。その頃は何でも一通りはしなければならないと考えられていました。次に、中学校では技術・家庭科を学んだのですが、女子は家庭科と製図や家庭工作、家庭機械、家庭電気を学ぶことになっていました。私には製図や家庭電気学習が新鮮に思われて好きな内容でした。

ところが高校時代の家庭科は、女子だけが学ぶ制度になっており、内容が社会的視野に欠けるという矛盾にみちたものでした。私の中には「なぜ女だけが家庭科を学ばなければならないのだろうか」という疑問が渦巻く結果となりました。さらに住居学習の中で「自分の家の悪い点を見つけ改善案を考える」課題に対して「改善すべきところがあっても、お金がなければどうにもならないじゃないの」と反発を押さえることができませんでした。そこで社会的に住居の問題を考えていきたいと、大学では住居学を専攻しました。

しかし、人生には偶然がつきものです。ピンチヒッターとして高校の教壇に立つチャンスが私にやってきました。しかも家庭科教師としてです。それは、批判する側から批判される側への逆転でもありました。悩みながら試行錯誤を続けている途中、高知大学に家庭科教育の担当として着任する機会が与えられました。一九七九年春のことで、この年の十二月には国連総会で「女子差別撤廃条約」が採択されたのです。

粉ひき

高知大学は男女共学ですから、当然のことながら担当する授業は何の苦労もなく男女共学であり、大変うれしいことでした。当時高校では制度上、女子のみ必修でしたから男子を学ばせることには大きな抵抗があったのです。男子学生は家庭科を小学校でしか学んでいないのですから、知識や技能には差があるわけです。そこで、男子学生が主体的に家庭科を担当できることをめざして授業を組み立てました。

学びの男女差を考慮した結果、「もとからつくる授業」として手織りや粉ひきを取り入れるようになったのです。これなら体験したことがないので全員いっしょのスタートができます。昔の生活を学ぶことで、これからの生活を創造していく上でのヒントも得られます。また家庭科が、今使える技能だけを扱うのでは時代とともに貧弱になってしまう恐れがありますし、商品化の流れに抗することが出来ません。粉ひきからうどんをつくる授業は重労働ですが、写真でご覧いただけるように、大いに盛り上がります。

さをり織りのファッションショー（95年度）

もう一つの視点は、人間関係に関するものです。今の教育が、人と人の関係を阻害する方に向かっているように思うのは、私ひとりの思い過ごしでしょうか。知識を増やすことばかりに目を向けるのではなく、人が共に力を合わせて、よりよい社会実現をめざして暮らしているんだという実感が必要ではないでしょうか。そのような観点での授業を考えるとき、障害のある人の存在や活躍は重要です。障害のある人との交流学習として「さをり織り」のファッションショーを取り入れて六回目を盛会のうちに終了したところですが、子どもさんや参加して下さる方々の生き生きした活躍ぶりに毎年接し、感動を新たにして私自身が大へん励ましていただいています。

このような実践は、学内外の方々のご協力とご支援の賜物ですので、この機会に改めて心より感謝申し上げたく存じます。これからも大学での教育実践を改善工夫したり、理論や実態を検討したりしながら、高校までの学校教育のなかで家庭科が重要な教科となるように、新しい家庭科教育を創っていきたいと思っています。

（高知大学教育学部教授）

高知市文化振興事業団編
高知のエスプリ　A5判・一六〇頁　定価一、二〇〇円

山本　大著
幕末の青春―坂本龍馬の生涯―　四六判・一六八頁　定価一、二〇〇円

依光　裕編著
珍聞土佐物語 上・下巻　四六判・三九二頁・四〇八頁　定価一、六〇〇円

鈴木文熹・井本正人・関根猪一郎著〈高知レポート6〉
協同組合と地域づくり　A5判・一三六頁　定価一、〇〇〇円

清遠幸男著〈高知レポート5〉
高知県の工業　A5判・一一二頁　定価一、〇〇〇円

外崎光広著
土佐自由民権運動史　A5判・四二四頁　定価二、八〇〇円

外崎光広編
土佐自由民権資料集　A5判・三四四頁　定価三、〇九〇円

今井嘉彦著〈高知レポート2〉
いかにすれば都市の河川はよみがえるか　A5判・一〇八頁　定価一、〇三〇円

岡林清水著
高知県文学散歩　四六判・二七八頁　定価一、八〇〇円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える　A5判・一八八頁　定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景　A5変・二二四頁　定価一、二〇〇円

筒井広道著
画帳の歳月　A5変・二五六頁　定価二、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義編
高知県方言辞典　A5判・七三六頁　定価六、一八〇円

高木啓夫著
土佐の芸能　B5変・三四六頁　定価四、九四四円

ニューエリア　熱き芸術家たち

― 回想の十年 ―

坂田　和

「四国は一つ」を合言葉に、愛媛・香川・徳島・高知の美術家の企画展である「ニュー　エリア展」は、今年は当番県である高知での開催となった。

目下、高知本部の北泰子さん、安井勝宏君たちは準備のため多忙である。

こういう状況の中で、私の頭をよぎるのは、一九八六年に坂出の「タブロー5」で開かれた五県美術家展前後―。いわば十年一昔のあれこれの事である。わけても、香川の現代美術団体「翏」代表の濱野年宏さんとの出会いは、五十代後半の私の生きざまを大きく変えた。五県美術家展の交流会の席だったか、「高知で四国四県の展覧会を」の話が出て、組織も、金も、何もない状況の高知でどうするのか―。と迷う一方で高知という風土のなかで埋没してはならぬの思いは有った。青いばかりの空の一角に、風穴を明けねばとの焦燥もあった。師弟五人で出発した現代美術「翏」が、地元に密着しながら、広い視野で国際的な活動をしているのを目にして、私の心は動いた。

定かな日は覚えていないが、高松駅前は雨であった。とあるうどん店で御馳走になりながら、私は高知での開催の意思を濱野さんに伝えた。駅までの見送りを受け、土砂降りの雨の夜空を眺めていた。傍の濱野さんが「やれますかな」と、つぶやかれた。大変なことを引き受けたな、との不安もあったが、別れ際ホームで握手―。「御吉報、待っています」の言葉に力付けられ、「ダメでもともと、賭けて見るか」と、帰途、車窓を打つ雨滴に目をやりながら、或る戦慄が身内を走るのを覚えていた。

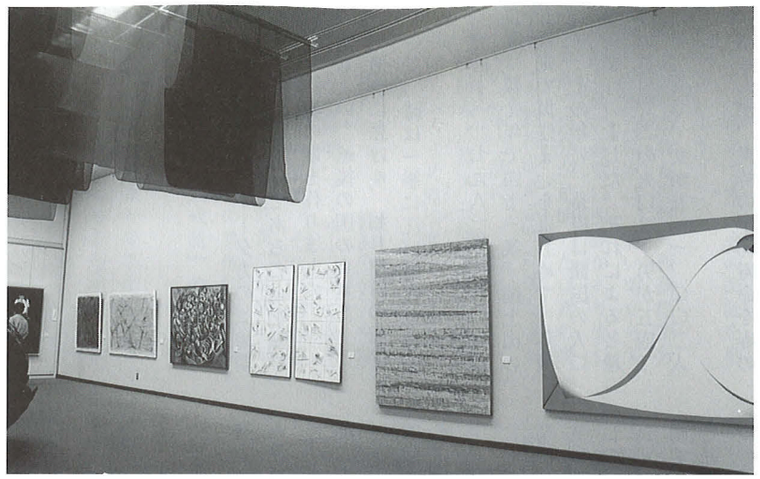
あれから十年、私は高知の世話人として動き、香川を始め愛媛の近藤さん、徳島の達見さんほか、多くの方々と出会った。もしこの出会いがなかったら、ニュー　エリアはなかったかも知れない。

五県展を発端としたニュー　エリア展は、八六年、ニュー　エリア南国展（香川・高知）の開催となり、八七年ニュー　エリア熱き芸術家たち高知展（愛媛・香川・徳島・高知）と続き、各県持ち回りで開催の形となった。この間、県内活動も重視、「ニュー　エリア高知」の名称でやってきたが、昨年、より充実した活動を狙い、県内活動では「フラクタル21」と改称して第一回展を県民ギャラリーで開催した。

ニューエリア高知展　テープカット　文化会館

当初よりの、エリア展の主旨は、唯一、次のようなものである。

「私たちはこの展覧会を四国、瀬戸内文化圏の現代を生き活動している作家の未来を拓く場とし、より芸術性の高い作品を展示、相互批評とコミュニケーションを継続させ各県美術文化の向上に貢献しようと考えています」。この主旨については、縛られる事を嫌う、土佐のイゴッソウ作家にどう受け入れられるか、多



ニューエリア坂出展会場

少の危惧は有ったが、瀬戸大橋開通に象徴されるように、もはや閉ざされたイゴッソウは、開かれたイゴッソウに変わらざるを得ない時代となり、目覚めた作家たちが参集した。主旨は作家の自由を縛るものでなく、むしろ解放する場と、意識の有り様に対する一つの呈示でもある。主旨が作家の内部で血肉化されるのには時を必要としたが、この十年は無駄ではなかったと思う。県内外を問わず種々の事で、摩擦、相剋は無かったとは言えないが、それぞれの芸術観に立ちエリア展そのものを高度なものにとの心情に起因したもので、低次元のものでなく、微温的な慣れ合いよりかえって貴重なものと思う。

ともあれ私はこの十年、多くの才能に巡り合った。他の会員もそうだと思う。食うという日常を背負い、作家として制作を通す事は大変だが、一人では出来ない事をやる私たちの周辺には素晴らしい人との交流と未来があることは事実である。

さて、今年のニュー　エリア展は八月中旬、各県五十余名の参加を予定、県民ギャラリーを第一会場として平面、立体、第二会場の市民フロアは、各県二名程で若手気鋭の作家にお願いし、作家どうしの企画で刺激、交流の場とする予定である。

八七年、旧郷土文化会館でのエリア展は最初の事であり難儀したが、ここに始めて立体を置く事が出来たのは、当時の館の方、旧友竹村文男さんの御助力が有った事、館の使用料の高額、一週間で四十何万には弱った。後日私は四国内の文化施設の使用料を調べ他県の二、三倍以上である事を知った。また、後援を取りに県に行ったのだが、知人がいて「坂田君、気の毒じゃが、そりゃ無理ぜよ」と同情された。「文化行政などこんなもんか」と腹立たしい思いをした。そんな時、市の文化振興事業団に資金援助を御願いに行って、即座に援助戴いた時の事は忘れ難い。

先日、企画委員のメンバーとの打ち合わせの時、県も市も、大変に好意的で共催の申し入れが有ると聞いて、いささか隔世の感がした。今年は高新厚生文化事業団の資金援助も戴くことになった。以前から気にしていた事だが、私共の運動は長期継続させねば意味がない。従って会員の経済的負担は出来るだけ軽減してゆかねば、やがて息切れ、停滞することも考えられる。共催が有れば利点となり、資金援助は何よりもありがたい事である。加えて今年は、知事、市長も作品を寄せて下さる事になろうが、私どもの主旨はそれぞれの県の美術文化の向上も大切と考えているので、以前と明らかに違ってきた行政の姿勢と対応して、より深く地域を見つめ、より高い視点で行動することが大事だと思う。

「心の時代」という。常套の句は嫌いだが、私共の呈示する作品と場がより新鮮に県民の皆様の「心」と共鳴するものがあれば幸いと考えている。

（フラクタル21世話人　画家）

ニューエリア坂出展

「医」の分野でみた良寛（上）

堀内　豊

去る二月一日。――夕方の気象情報で「あすは雪」であることを知り、夜更けに次の歌を作りました。

雪もよい　越後の国の良寛を
遥かに思ほゆ　如月朔日の夜半

さて、時は一挙に江戸時代に移ります。

寛政十（一七九八）年。といえば、良寛は数え年で四十一歳。国上山の五合庵で仮住まいをはじめて一年後です。その年に、幕府は諸国の人口調査を行いました。それによると越後国（新潟県）の人口は、男が五四二、六七二人で、女が五一一、〇〇二人でした。

ある人が、当時の平均寿命を寺の過去帳で調べると、およそ二十八歳と推計され、その七〇％は乳幼児でしたから、成人の平均寿命は四十歳そこそこだったでしょう。

そんな時代に、よくぞ良寛は七十四歳まで生き長らえたと、ほとほと感心します。

ところで、戦時中に高田（上越市高田）に疎開していた詩人の堀口大学は、「越後の冬は長いから　半としつづく冬だから」と歌いましたが、良寛は、「千峰凍雪合し　万径人跡絶ゆ　毎日ただ面壁のみ　ときに聞く窓に灑ぐ雪」（どの峰も雪に凍り、どの道も人は通らない。私は毎日座禅を組んでいる。ときどき窓に吹きつける雪の音を聞いている）と、酷寒の五合庵で、座禅をしたり、和歌、漢詩を作り、読書や墨書に親しんで長い冬をしのぎました。

春、夏、秋の天気の好い日は、標高三一三メートルの国上山の中腹から下りて、近在の村やまちを托鉢（同時に知友を訪問）して歩きました。

だいたいこのような実生活を四十代から五十代の後期まで、ほぼ十五年ほど続けています。すると良寛は、自分の健康保持にかなり周到な心くばりをしていた筈です。

現にこんにち残っている資料を推考しますと、医療知識は常人以上に会得しているのです。その例証を挙げてみましょう。

国上山麓の牧が花村（西蒲原郡分水町）の解良栄重は、若い頃から父の叔問と共に良寛に面識がありました。それで自分が見聞した良寛の事跡を、『良寛禅師奇話』に著しました。その二十二話に、

「師能人ノ為メニ病ヲ看、飲食、起居心ヲ尽ス。又能按摩シ、又灸ヲス。（後略）」

と、あるように、他人の病気を診察したり、按摩（マッサージ）や灸を据えたりしています。それに自身の保健については、「飲食、起居心ヲ尽ス」のですが、その具体的な例証は、良寛の遺した『戒語』の中に示されています。

『戒語』は、良寛が後半生に人々から乞われるままに書き与えたもので、十八篇ありまして、およそ百か条、百則に及びます。

ここでは「飲食、起居心ヲ尽ス」にかかわる条文だけを現代文で抜粋してみましょう。

○朝寝すべからず。
○手足の爪を切るべし。口そそぎ楊子を使うべし。
○湯浴すべし。
○声を出だすべし。
○油濃き魚食うべからず。昼寝を長くすべからず。
○身にすぎたことすべからず。
○草木を植え、庭を掃除し、水を運び、石を移すべし。
○怠るべからず。
○油のもの食うべからず。常に淡きもの食うべし。
○ものをかたことにすべからず。
○おりおり足に灸をすゆべし。
○酒を暖ためて飲むべし。
○心にものを隠すべからず。

以上は他人の求めに応じて書いた条文ですが、見方によっては、良寛はみずからに課した自戒の言葉です。実際、彼の処世のありようから考えても、何事にも〝節制〟を本志にふるまってきましたから。……

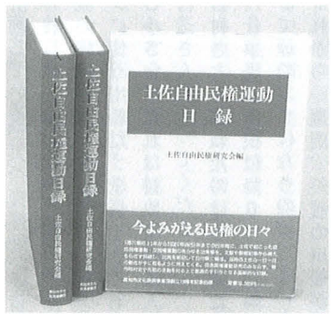
ところで、良寛の日常における〝飲食〟の中味はどうだったでしょうか――。

良寛に『請受食文』があります。修行僧の食を乞う心得を説いた文章です。その冒頭に「食を受くるは仏家の命脈なり。これをもって展鉢の式あり。乞食の法あり」と、はっきり述べております。

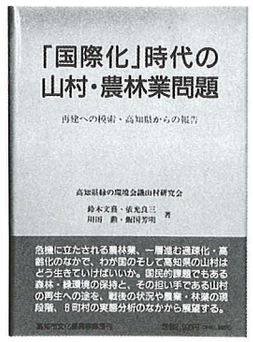
ですから、彼は托鉢（僧が経文を唱えながら、鉢を持って家々を回り、米や銭の施しを受ける）して物品を頂き、また庇護者の阿部定珍、解良叔問、原田鵲斎などや、親族縁者、土地の人たちから贈り物を受けました。つまりお布施です。良寛は贈り物を受けとるとかならず礼状を送っています。それには物品名を書いてありますので記してみます。

山芋。餅。米。菊の味噌漬。白麦。豆。みそ豆。なす。菜。ちょう菜。かしゅういも。大根。ごぼう。人参。唐辛子。茗荷。けとう（蓮）わらび。なんばん。ぜんまい。芹。あおさ（石専〝海草〟）。海苔。海松。昆布。鮒。肴。かんぴょう。油揚げ。そうめん。焼き麩。くず粉。みそ。径山寺みそ。納豆。なんばん漬。百合根。花梨漬。つけあげ。ちまき。りんご。ざくろ。　以上。

（高知県地方職業安定審議会委員）



高知市文化振興事業団創立10周年記念出版
土佐自由民権運動
日　録
土佐自由民権研究会編
B5判・上製本・函入り　496頁
定価10,000円（税込）



「国際化」時代の
山村・農林業問題
再建への模索・
高知県からの報告
高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明 著
A５判・上製本・288頁
定価2,000円（本体1,942円）

四万十川の川船

中村　淳子

船をゴトゴト追いかけている。そもそも自然と深く対峙してきた人びとの、生きざまに関心がある。それが特に漁をする人びとへと向かい、その一環で船を、先学に導かれて調べようと思った。

船という道具を使って、人は陸から海や川へ活動範囲を広げた。追っているのは、中でも木造の和船だ。土地土地で多様な和船が伝えられている。

海には鰹船や鯨船など、勇壮な、土佐らしい和船があった。鰹船や鯨船は残念ながら実物は残っていないが、船大工の手で復元された船が室戸市などで展示されている。神社に奉納された船の模型や絵馬に、船の形や漁の様子を見ることも出来る。

信仰の道具としての船もある。県東部の沿岸地域には回船や鯨船の模型を乗せた山車、御座船を象った山車などが曳き出される祭礼が多い。神輿を乗せて海上渡御などに活躍する漁船もあり、興味は尽きない。

川船は漁の道具ばかりでなく、沈下橋のない頃に渡し船が人や牛を川の対岸に渡し、かつてセンバや高瀬船が上流と下流の間を物資を乗せて往来したように、交通や運搬の重要な道具でもあった。しかし現在では、県下の河川でかつてのように交通や運搬の道具として和船が使われている例は、中村市勝間の渡し船の他は寡聞にして知らない。元気に活躍中の和船は、漁に使われている川船だ。

仁淀川と四万十川のごく一部の川船しかまだ調べていない。それでも比べると仁淀川の船は二枚棚だが、四万十川の船は大体が一枚棚。棚というのは船の側面の材である。また、仁淀川下流の船にはチリという船尾の緩衝材があるが、四万十川の一枚棚の船のお尻には見かけない。

こうした河川による船型の違いは何によるのだろう。仁淀川の下流には海の船を主に造りつつ川船を造る船大工が幾人かいたので、海の船の技術がもたらされたのかもしれない。

河川ごとに川船を調べていきたいが、ひとつの河川だけを取りあげてみても上流・中流・下流によって形が異なる。漁法や船大工の技術による違いもあり、奥が深い。

そこで、四万十川の漁と暮らしをテーマにした高知県立歴史民俗資料館の来年夏の企画展で、四万十川の上・中・下流の三艘の川船を展示しようと計画している。

一艘目は上流とはいえ四万十川の支流の梼原川で、火振漁やイタチバカシに使う川船だ。全長4メートル強と小さい。これは梼原町の船大工、吉村透さんが造ってくださった。

吉村さんを訪ねたのは冬の朝だった。仕事場の屋根に降りた霜が陽にとけて煙のようにたちのぼっていた。

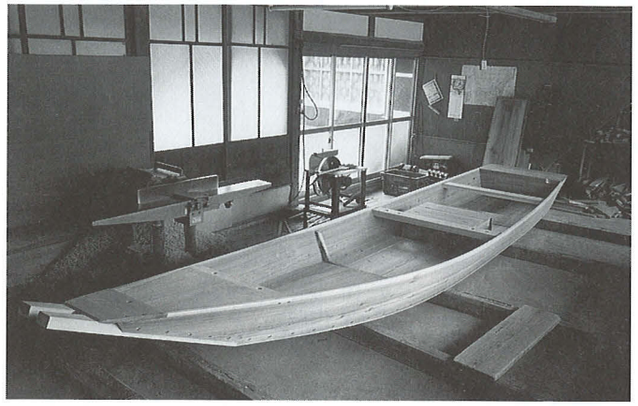
それから一週間、一艘の川船ができあがるまで手際のいい仕事を見つめ続け、記録する。時折手を休めて吉村さんは「シキの真ん中をちょっと上げるのが荒川で乗る船のコツよ」などと教えてくださる。シキとは船底材のことだ。

四万十川の支流、梼原川の船を造る吉村透さん

船釘用の穴をあける中脇定義さん

吉村さんは仕上がった川船に船霊さんを入れる。船霊さんは船の神様だという。川で三回船をまわし、その度に竿で舷を叩き、その後で船の前を叩いて船霊さんを入れる。竿というのがいかにも川船らしい。

「新船をやるときには大事に乗ってくれぇよというておる。船は命に関わるものじゃけんの」と吉村さん。また、「替え竿を乗せちょかないかん」と言う。川底の岩の間に思わず竿を突っ込んでしまい、取れなくなったりするときの用心だ。



中脇定義さんが造る四万十川中流の船

中流の船はぐっと大きくなる。二艘目は十和村の船大工、中脇定義さんに造っていただいた6メートルの川船だ。火振漁や鮎の友がけに使う。

船造りを見せていただいたのは、桜の季節だった。燕が来るのが例年より遅いと中脇さんは気にしていた。

中脇さんは棚に使う杉の長い板を選るときに「この木は中の方に節があるが、子どもの頃に枝打ちしてもろうてない。この木で大体六十年、俺とそちこちない。この木は十一年目に傷しちょるが、山から石でも落ちて来たろうかねぇ」と年輪を数えながら教えてくださる。暦の上で土の日に切った木は良くないと言う。反った板は縮んだ方を水で濡らし、伸びた方を日に乾かして真っすぐにする。船造りの技は、豊富な木の知識に裏打ちされていた。

しかし木だけで船は出来ない。中脇さんは同じ十和村の鍛冶屋、芝条一さんに船釘を鍛ってもらう。幼なじみの芝さんが鍛つ船釘を使って、中脇さんは船を造っている。

吉村さんも中脇さんも、以前は林業に携わっていた。今は椎茸や茶を栽培し、山の暮らしの中で川船を造り、川漁をしている。川船専門の船大工には自分で使って乗りよいように船を改良する方が多いように思う。

吉村さんは「イタドリの芽が出る頃に鮎が上がり、クズの花が咲くと鮎が下がりはじめる」と言う。流域の人びとはそんなふうに自然のリズムを把握して漁をする。「夫婦喧嘩をしていても、火振をする日には仲直りよ」と中脇さんは笑う。夫婦一緒の火振を、それは楽しみにしている。

出来上がった川船二艘、杉の赤身が使われ、桜色と朱色の交じったような優しい色合いだ。船を受け取りにうかがうと、吉村さんのお母上が「今日が嫁入りかね」と言う。中脇さんも「嫁入りすることになったぞ」と、まるで娘のことのように傍らの奥さんに告げた。造り手側の気持ちが表れた言葉だと思う。

今年度は四万十川で三艘目になる下流の船を、中村市の加用克之さんにお願いする計画だ。

和船は優れた「木の文化」のひとつだと思う。風を受けても安定しているなど、木の船にはいいところがたくさんある。船の形、船大工の技術は地域の歴史や個性を主張する。

資料館の収蔵庫が狭いからと躊躇している間に失われた船もある。力も財も足らなくて情けない。記録や実物を残すことが大切な仕事だと思う。

けれどそれ以上に技と知恵が人から人へと伝わればと思う。そう簡単にいかないから、多くの「文化」といわれるものが失われてきたのだが。

（高知県立歴史民俗資料館学芸員）

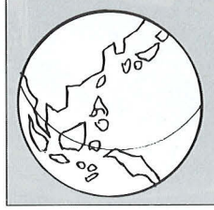
ズームアップ

東南アジア

（5）

開発援助のこと

小林英治



わが国の政府開発援助（ＯＤＡ）は一九九一年総額一〇〇億ドルの大台に乗り、アメリカを抜いて世界一の規模となった。日本の援助の対象となっているのは世界の一五八の国や地域に及ぶ。

一般会計予算に財政投融資などを加えた途上国援助予算は一九九六年度一兆七千九百九十八億円に達した。国民一人当たり年に約一万四千円余を負担している勘定になる。どのような目的でどのようなプロジェクトに使われているのか、途上国の開発のために役立っているのか。

援助の対象となっている地域はわが国と密接な関係のあるアジアの国々が多く、なかでも東南アジアのシェアが高い。九二年まではインドネシアが年間最大の援助受け入れ国だったが、最近では中国とインドがトップを占めている。これにインドネシア、フィリピン、タイといったＡＳＥＡＮ諸国が続く。わが国が起こした戦争で迷惑をかけた国々である。

援助には返済義務のない無償協力と資金を貸し出す借款があるが、いずれも途上国の経済・社会の発展を支援する。道路や港湾の整備、灌漑施設の充実、発電・送電線の建設といった経済インフラのプロジェクトに使われたり、学校や保健衛生施設の建設、環境保護のような社会開発プロジェクトを推進する。

かつてわが国の援助が途上国の特定の層を潤したり、わが国業者の談合入札が問題となったりした。完成したプロジェクトが途上国の予算や人材の不足からうまく稼働していない例もある。しかし一部に問題があることは事実だが、総じて七、八割の援助は途上国のため役立っていることを事後評価が示す。援助により完成した道路や港湾施設、発電所などのインフラ・プロジェクトは今日アジア諸国の経済成長を支え、日本を始めとする企業のアジア投資に大きく貢献していることは言うまでもない。

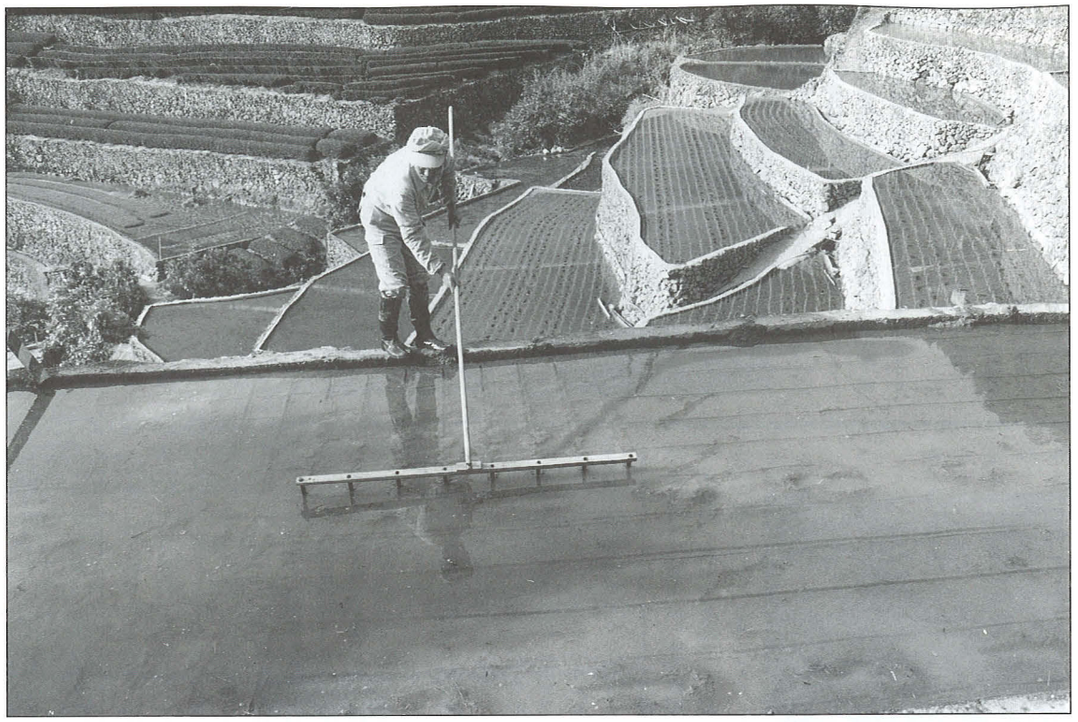
私が家族とともに生活していたマニラでは一九九〇年代の初頭、深刻な電力不足から毎日のように停電に悩まされた。暑いところでクーラーは使えず、明かりのない生活では子ども達の勉強にも支障をきたした。工場の生産活動もままならず、当時フィリピンの経済はどん底だった。政府の要請により日本やアジア開発銀行の緊急援助で発電所の建設が進められた結果、やっと電力不足が解消したことを思い出す。このほか当時マニラでは台風による洪水が頻発し、乾季には水不足も深刻だった。

現在バンコクやジャカルタ、マニラといった大都会では人口が急増し、また生活水準の向上に伴って、車の数が急速に増え交通渋滞が引き起こされている。これを解消するために、わが国の援助により地下鉄や高架鉄道などの建設が検討されている。

アジアにおける経済発展のブームの影に、人々の間の経済格差の拡大とそれに伴う貧困層の問題が顕在化してきた。一日当たりの所得が一ドル以下というぎりぎりの生活を強いられている貧困層は、現在途上国を中心に十三億人を数えると言われる。地球上に住む人の四人に一人の割合である。このような人たちをなくすことに今援助の重点が移されている。貧困は同時に環境の問題とも結びついており、都市における環境汚染および山村における熱帯林の破壊のもととなっている。

これらの問題に取り組むわが国や世界銀行、アジア開発銀行など国際機関による援助、それに最近では現地の草の根の人々とともに協力するＮＧＯの活動は今後ますます重要性を増してこよう。

（高知大学人文学部教授）



第12回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

棚田の田植え

森田　清一

すりこ木の罰

風俗歳時記

寺田寅彦の随筆の中の「重兵衛さんの一家」に、少年時代に楽しく聞いたというカラスの退治方の話が出ている。

「牛の背中に赤い紙片を張りつけ、しっぽにすりこ木を縛り野良へ出しておく。カラスがおりて来て背中の赤紙を牛肉と思ってつつくと、牛は蠅でも追う気でぴしゃりとしっぽで叩く、するとすりこ木の一撃でカラスはもろくも撲殺される」といった概要だ。子どもにこの話をすると「牛さんが可哀相」という。カラスが避けたら痛かろうとのこと、偏ってはいるが面白い解釈ではある。

寅彦の少年時代はともかく、まだ少し以前まで牛は農耕用として農家の貴重な労働力であった。農繁期には代かきの犂を曳く長閑な姿が田園風景に溶け込んでいたものだが、今は機械のエンジンの音に掻き消されたようにその姿は見ることができない。

現在、その牛も我が県では品種改良され、土佐の赤牛という肉牛として専ら人様に尽くしているという。

社会経済情勢の変化とはいえ、こうした大きな転換は〝牛さん可哀相〟の感は否めない。

さて今、欧州では狂牛病とクロイツフェルト・ヤコブ病（ＣＪＤ）の因果関係をめぐりパニック状況になっている。

狂牛病は、元々羊にあったもので、羊を飼料に加工し牛に与えたことにより感染したものだと言われている。

病原体のプリオンによって脳がスポンジ状になり死に至るこの病気は、考え方によっては人間の勝手に対する〝すりこ木のしっぺ返し〟と言えなくもない。

「牛から人に感染する」「いや豚や鶏も飼料を通じこの病気と接しているのに感染していない」「疑いのある牛は全て屠殺するから大丈夫」等々かまびすしい。

いずれも己の都合ばかりで、牽強付会の域を出ていない。既に脳はスポンジ状になっているのかも知れない。

（かむ）

「トロピカーナ」

ラテン・リズムに魅せられて…

東　正吉

マンボ・チャチャチャ・ルンバなどラテンリズムを聞けば誰れでも自然に体が動いてくる。私たちのサークルは、エキゾティックなコンガの響き、ボンゴの乾いた音、グィロやマラカスの歯切れの良いリズムに魅せられた人達の集まりです。

ラテンパーカッションを中心にラテンリズムの勉強をしています。会員の顔ぶれは、定年後始めた人や、自営業の人、学校の先生など年齢層も幅広く、ベテランの講師に指導を受け、今までに、ワンパークこうち開所式や、市民講座、養護学校、小学校音楽鑑賞会等多くの場所で日頃の成果を披露させて頂きました。

ラテンリズム楽器の代表格がコンガという太鼓ですが、一つの楽器で色々な音色が出せる代物ですが、これが仲々良い音が出ず難しく、奥が深いものとなっています。どの楽器一つにしても音出しについては、思うようには行かず、毎回が真剣勝負ですが楽しく練習をしています。

今私たちにはメロディーラインを弾く人が無くアンサンブルが出来ません。どなたか仲間に入って下さいませんか。

一緒に練習してみたい方は、楽器が無くても結構です。ご連絡を下さい。

練習日は殆ど毎週土曜日午後一時から五時まで筆山文化会館内で行っています。

連絡先　高知市新本町一―十四―九
　　ラテントロピカーナ　東正吉
電　話　〇八八八―二五―三七三一

「こねこねクラブ」

希望はでっかく

松本美千代

昨秋、安芸登り窯フェスタ作品募集を見たのが切っ掛けで誕生した「おしゃべり仲間」のグループです。無審査、全て作品になるとの歌い文句に釣られて参加しました。陶芸とは無縁の作品ばかりでしたが、「失敗も個性」と良い方に納得し、焼き物への熱は冷めませんでした。フェスタから三ヶ月後、歯科で不用になった小さな電気窯を譲り受けたことで陶芸に目覚めたのです。

以前、PTA活動で二～三度陶芸の基礎をかじった仲間を師と仰ぎ、土を叩く、捏ねる、重ねるを繰り返しながらも、一つずつ作品になる喜びを知りました。

「もっと大きいものを作りたい。」という大胆な仲間の声で今年四月、高知市に窯がある事を知りました。目標を「市の窯」に置き、雛人形、兜、食器、モニュメント等、楽しい作品づくりが始まりました。恐い者知らずの九人は、仲間の失敗を踏み台に、自分の成功は鼻にかけ、励まし誉めあいながら今月で十ヶ月目。出来上がった作品は発想、着想とは程遠いものですが、チャレンジ精神を忘れる事なく土を捏ね捏ねしているクラブです。

グループ紹介の原稿依頼が届いたとき血の気の引く思いをしました。この様なクラブがある事で元気を持ってもらえたらと思います。四十路、五十路坂を喘ぎながら上りつつ「希望はでっかく」私たち土と楽しんでいます。

連絡先　高知市秦南町二―七―五
電　話　〇八八八―二三―一六〇七

「ラポール王国実行委員会」

三回目は中村市で

諏訪　博信

このラポールという言葉はフランス語で「信頼関係」「あたたかい人間関係」という意味です。高知県在住外国人及びボランティア活動指導者をスタッフ（親）に小学校一年生から高校三年生までの参加者を子供として家族をつくります。ゆえにアメリカ人のお父さんができ、視力障害児の妹ができた家族となります。その家族で一泊二日どのように一緒に楽しむかが、ラポール王国の中心テーマです。

また、そのことを通して、お互いのハンディを認識し、その中から長所を見つけ合い信頼関係を築きながら国際感覚とノーマライゼーションを自然に身につける王国であります。

第一回目は香北町で、二回目は大方町で開催致しました。

本年は、中村市のオートキャンプ場『とまろっと』で八月三一日(土)～九月一日(日)に建国します。参加希望の方は、事務局へ七月二〇日までにご連絡下さい。また、ラポール王国のテーマソングを堀内佳さんにつくってもらい、CDとなりました。CDの問い合わせは、ラポール王国後援会へご連絡下さい。

第三回ラポール王国事務局
連絡先　中村市東町一―一〇―二二
　　野村総合学習内　野村　昌樹
電　話　〇八八〇―三四―〇〇六九
ラポール王国後援会（CDなど）
連絡先　高知市横内一五三―九五
電　話　〇八八八―四〇―三三二七

好評につき二刷発売中！

土佐弁　土佐日記

土居重俊監修　B6判・130頁・上製本
高知市文化振興事業団 編　定価 1,300円

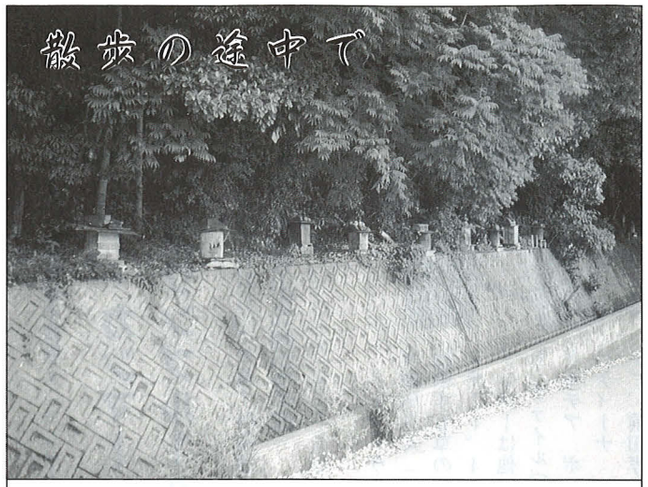
紀貫之の名著『土佐日記』を、とさことばでつづるとどうなるか？古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

好評につき二刷発売中！

高知の森林

高知県緑の環境会議　森林研究会　編
B5変型・228頁　定価 2,500円

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、まだ残されている貴重な自然や植生のほか、森林と人々とのかかわりの歴史や、現地への道のり等も紹介。



上本宮町から岩ケ渕へ向かう鏡川添いの道、疎水を隔ててほぼ等間隔に蜜蜂の巣箱が置いてある。40箱程もある。小さな灯籠か、お地蔵さんが並んでいるような趣がある。

それにしても、最大の蜜場であろう対岸の米田地区の宅地化が急速に進んでいる。このままでは、40匹の女王蜂の生存をかけた凄まじい戦いが始まらないかと心配にもなる。

風伯

雨に唄えば

今年の正月、海外旅行から帰った友人がアメリカ製の誕生祝いのカードを見せてくれた。

風船やキャンドルなどのハデなデザインの表紙には〝1929〟と大書してあり、カードを開くと左右二頁にわたって、この年のおもなトピックスを項目別に列挙してある。

因みに、一九二九（昭和四）年はこの友人の生まれ年。当年六十六歳。

カードの〈芸能〉の項に〝無声映画（サイレント・フィルム）からトーキーへ移行中〟、〝ビット・ソング（シンギン・イン・ザ・レイン）は雨に唄えば…〟とあるのを見て、「おやっ？」と思った。土砂降りの雨の中で、ジーン・ケリーが華麗に歌い、踊るシーンであまりにも有名な、あの映画を観たのは、たしか一九五〇年代の初めだったのに……曲の意外な古さに驚いた折も折、二月二日にケリーが逝った。行年八十三歳。

新聞・雑誌の追悼記事を読み、専門書に当たってみて、疑念が晴れた。

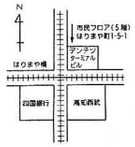
「雨に…」のヒットから三十余年を経て、この曲の作詞者アーサー・フリードが同曲をタイトル・ソングとするミュージカル映画を製作。その中で、無声映画からトーキーに転換した頃のハリウッドの楽屋裏（キンキン声の主演女優に共演者一同大弱り）を喜劇仕立てで描いてみせたのであった。

五・六月には、東山紀之・薬師丸ひろ子という異色コンビによって、同映画の名場面の数々が舞台で再演され、好評を博した。名振付師（ジャンケリー）・舞踊家の冥福を祈る。（念）

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備
所　在　地　高知市はりまや町一―五―一
　　デンテツターミナルビル5F



お申し込み
(財)高知市文化振興事業団
☎73―4365

ドイツ・ウルム市からの日本縦断ミニコンサート

ウルマー・カンマー・アンサンブル1996

平成8年7月27日(土) 午後7時開演（6時30分開場）

高知市立自由民権記念館

前売り二三〇〇円（当日二六〇〇円）※自由席

ドイツ・ウルム市在住の杉本暁史さん（ファゴット）が提唱する草の根の音楽交流コンサート。4回目の来高です。メンバーは他に、ベルンハルト ファイル(クラリネット)、ドロテア ボルト(チェロ)、ベティーナ ハインツ（ピアノ）、前田孝一（テノール）で、地元音楽家も共演します。

曲目はヴィヴァルディ、ショパン、フォーレ、ドビュッシーなど親しみやすい選曲です。

チケットは市内主要プレイガイドおよび文化振興事業団で発売中です。

お問い合わせ・電話予約は高知市文化振興事業団まで。

※託児もありますのでお申し込み下さい。

第12回市民フロア企画展

徳広秀光新作版画展

とき 1996 7月4日木—16日火

AM 10:00～PM 6:00（会期中無休）

市民フロア

（はりまや橋・デンテツターミナルビル5階）

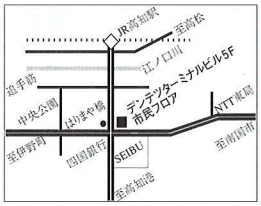
☎0888—85—2393（会期中のみ）

主催：(財)高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町5—2—3

☎ 0888—73—4365

後援：高知新聞・RKC高知放送・KUTVテレビ高知 NHK高知放送局



■ 新刊 ■

清流を子らへ

——21世紀に残したい鏡川——

高知県河川環境研究会編 A5判・並製本122頁・定価1,030円

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

財団法人 高知市文化振興事業団 〒780 高知市本町5丁目2番3号 TEL(0888)73-4365 郵便振替01680-5-14869